

2 0 2 2



河合文化教育研究所からの推薦図書

河合塾

読書への^{いざな}誘い

河合文化教育研究所 所長 木村 敏

本を読むということには、どんな意味があるのだろうか。それは私たちの心に何をもたらすのだろうか。

たくさん本を読めば確かに知識は増える。また本を読むことによって今まで知らなかった未知の世界を垣間見ることできる。それはもちろん望ましいことだろう。しかし現在のネット社会の時代には、知識も瞬間的な体験もネットから手軽に得ることができるともいえる。だが、そこから得ることができるような断片的な知識や表層の経験をどれだけ数多く寄せ集めても、人生を豊かにしてくれる「教養」というようなものは身につかない。

教養とは、私たちの心を深く耕すものことである。ひとまずこう言ってもいいだろう。それを通して、幅広い視野や洞察力、深い思考力が生まれ、そこから私たちは「自分とは何か」、「生きることは何か」といった根源的な問題を考えることができるようになる。そうすると、この世界のうちに自分一人では存在することができないこと、自己が自己であるためには必ず他者の存在が必要になってくることもわかってくる。生きるとは、世界のうちで、互いに傷つきやすく脆い身体を基盤にしながら、他者とともに存在することである。その自覚のなかから、他者に対する想像力も生まれてくる。そのことが私たちの心をいっそう豊かなものにしていくのである。

では、教養を自分の中で培うには、つまり心を耕すにはどうしたらよいのだろうか。それは、良い本を読むことである。良い本とは、ある時代のある場所に生きた書き手が、彼が生きた時代の矛盾に向き合い格闘し、苦しみ考えながら自己の内的必然性に促されるようにして書いた本のことだと言ってもいいだろう。そうして書かれた本を、ゆっくり時間をかけて読む。そうすることによって読者は、いつの間にか書き手が生きている、その人だけの世界に入り込むことになる。本の書き手の生きているこうした世界こそが、一つひとつの知識や情報を、背後から目に見えないかたちでつなぎ、読む者の心に奥行きを与えてくれるような意味を発酵するのである。

ある人が歳月をかけてつくりあげたその人だけの世界に、何日もかけて持続的に住み着き、彼の体験や思考をその内側から自分の中に取り入れるということに

なると、やはり読書以外に手段はない。すぐれた書き手の世界を深く体験することで、読者の心は豊かになり、さまざまな感性が磨かれていく。こうしたことのすべてを教養だといってもいいかもしれない。

*この「読書への誘い」は、河合文化教育研究所所長だった木村敏先生によって毎号書かれてきたものです。心の病を持つ人と真摯に向き合う中で「臨床の知」を模索して来られた先生は、精神病理学者としての自身の経験から、読書がいかに人に生きる力を与える大切なものかということを深く認識しておられました。その思いから、この『わたしが選んだこの一冊』にも創刊時から熱意をもって関わられ、自ら若い人に向けてこの冒頭の案内を書いてくださった次第です。先生は昨年8月（1931-2021）に亡くなれましたが、今号では在りし日の先生を偲んで、そのご挨拶をそのままここに収録させていただきました。

* *

本冊子について

本冊子『わたしが選んだこの一冊』は、世の中のデジタル化が急激に進む中、多くの若い人々にもう一度読書の意味と楽しさを知ってもらおうということで、河合文化教育研究所が2010年に鋭意刊行を開始した「読書案内」です。執筆者には、河合塾の講師や河合文化教育研究所の主任研究員だけでなく、外部の方々——河合文化教育研究所のシンポジウムや研究会、講演会、出版などに深い問題意識と共感をもって関わっていただいた識者の方々——に参加していただいています。本冊子は、執筆者の方々に自分の人生の中で大きな影響を受けた特別な本を選び出してもらい、それについて短いながら熱い思いを込めて書き綴っていただいた原稿をもとに、新しい「読書案内」として作成したものです。

2010年の創刊号から2021年版まで、これまで12年間にわたって年刊で発行してきましたが、多くの人々が関心を寄せて下さったお蔭で、その発行総数は累計80万部を超えることになりました。いかに多くの方が、読書を人生で必要なものと考え、良い本への道しるべを望んでおられたかにあらためて思い至った次第です。

本冊子は、それなりの使命をまっとうしたのではないかと考え、今回のこの2022年版をもっていったん終刊することになりました。

これまで若い人々の心に届くような豊かで刺激的な原稿をお寄せ下さった多くの執筆者の方々、そしてこれをていねいに読んでくださった多くの読者の方々に、この場をお借りして心からお礼申し上げます。

（河合文化教育研究所）

もくじ

読書への誘い^{いざな}..... 1

《推薦図書》	《推薦者》
『近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻』山本義隆著	青木和子 4
『限界芸術論』鶴見俊輔著	伊藤裕夫 5
『中絶がわかる本 MY BODY MY CHOICE』ロビン・スティープンソン著 塚原久美訳	岩本美砂子 6
『笛吹川』深沢七郎著	鶴飼 哲 7
『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか(上・下)』増田俊也著	大澤真幸 8
『オリガ・モリソヴナの反語法』米原万里著	太田昌国 9
『「日本」ってどんな国? 国際比較データで社会が見えてくる』本田由紀著	櫻村愛子 10
『ハックルベリー・フィンの冒けん』マーク・トウェイン著 柴田元幸訳	加藤秀一 11
『あしながおじさん』ジーン・ウェプスター著 岩本正恵訳・『十五少年漂流記』ジュール・ヴェルヌ著 石川 湧訳	金子 勝 12
『象徴天皇制の起源 アメリカの心理戦「日本計画」』加藤哲郎著	菅 孝行 13
『優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』米本昌平・松原洋子・棚島次郎・市野川容孝著	小松美彦 14
『近代日本の政治家』岡 義武著	小山俊樹 15
『日本語に主語はいらない 百年の誤謬を正す』金谷武洋著	最首 悟 16
『感じるオープンダイアログ』森川すいめい著	斎藤 環 17
『絶望の精神史』金子光晴著	酒井隆史 18
『石原吉郎詩文集』石原吉郎著	佐々木幹郎 19
『安保条約の成立—吉田外交と天皇外交—』豊下楯彦著	白井 聡 20
『ある革命家の手記(上・下)』P. クロボトキン著 高杉一郎訳	田中克彦 21
『あいだ』木村 敏著	谷 徹 22
『囚われの女たち 山代巴文庫一期全10巻』山代 巴著	千本秀樹 23
『信州に上医あり—若月俊一と佐久病院—』南木佳士著	都築佳枝 24
『赤頭巾ちゃん気をつけて』庄司 薫著	寺脇 研 25
『キッパリ! たった5分で自分を変える方法』上大岡トメ著	仲野 徹 26
『時間と自己』木村 敏著	野家啓一 27
『他者の苦痛へのまなざし』スーザン・ソントグ著 北條文緒訳	野間俊一 28
『楡家の人びと(全3巻)』北 杜夫著	平田オリザ 29
『神殿か獄舎か』長谷川 堯著	布野修司 30
『若者と労働 「入社」の仕組みから解きほぐす』濱口桂一郎著	細谷 実 31
『ヴェニス商人』シェイクスピア著 福田恆存訳	水野和夫 32
『10年後の福島からあなたへ』武藤類子著	宮本ゆき 33
『七転八倒百姓記 地域を創るタスキ渡し』菅野芳秀著	武藤一羊 34
『アジアの歴史 東西交渉からみた前近代の世界像』松田壽男著	森安孝夫 35
『被差別部落認識の歴史 異化と同化の間』黒川みどり著	門馬幸夫 36
『動物農場 おとぎばなし』ジョージ・オーウェル著 川端康雄訳	山口二郎 37
バックナンバー.....	38

河合文化教育研究所

河合文化教育研究所の歩み 46

主任研究員 47

出版 河合ブックレット・単行本・河合おんぱろす 49

主任研究員の著書から大学入試問題が出題!・研究会紹介 55



中絶がわかる本 MY BODY MY CHOICE

ロビン・スティーブソン 著 つかはらくみ 塚原久美 訳

アジュマブックス [定価:本体2,500円+税]

推薦 岩本美砂子 (いわもと・みさこ)

1957年、広島県尾道生まれ。京都大学法学部卒。名古屋大学大学院法学研究科を経て三重大学講師。1996年4月から2022年3月まで三重大学人文学部法律経済学科教授(政治学・女性学)。1982～3年の大学院生時代に、優生保護法の中絶できる理由から「経済的理由」が削られるのに反対運動をしていたとき、河合塾の国語の講師だった。

著書：『百合子とたか子——女性政治リーダーの運命』(岩波書店)、監訳書『中絶と避妊の政治学』(青木書店、原著ティアナ・ノーグレン)。

共著：『ジェンダー社会科学の可能性①』(岩波書店)、『政治参画とジェンダー』(東北大学出版会)など。

世界中で毎年、何万人もの女性が、中絶が非合法な状況下で、危険な中絶で命を落としている。日本は、母体保護法で「身体的または経済的な理由」による中絶が認められており、それよりマシだと言えるだろうか。日本にはまだ1907年の刑法212条～214条に、墮胎罪・同意墮胎罪(手助けした)・業務上墮胎罪がある。外国では1980年代末から承認・実用化され、今では約80カ国で承認されている経口中絶薬が、日本ではまだ承認されていない。経口中絶薬とは、ミフェプリストン(妊娠を維持する黄体ホルモンの働きを抑える)とミフェプリストール(子宮の収縮作用がある)の組み合わせで、今年末か来年中に承認される予定だが、処方して良いのは、母体保護法指定医のみになりそうだ。インターネットで購入して飲めば自己墮胎罪、無資格者が別人に渡すと同意墮胎罪になるおそれがある。

日本では、毎日飲むタイプの避妊ピルも月額2000円～5000円と高く、保険が効かない。今の中絶方法は、1948年に優生保護法で中絶が合法化されて以来採用されてきた掻爬法で、WHOから危険な方法だと警告されている。他国では、中絶の合法化は1960年代末以降と遅かったが、安全な吸引法が用いられてきた。それが経口中絶薬に移行しているのだ。

1996年に優生保護法から強制不妊手術などが削除されて母体保護法になった際も、中絶に配偶者の同意が必要という条項はそのまま。望まない妊娠であっても、相手の同意が得られないで中絶可能な時期を過ぎてしまい、一人で出産して新生児のケアが出来ず(素人には難しい)、保護義務者遺棄致死罪に問われる女性もいる。配偶者の同意が必要な国は、すでにわずか11カ国・地域になっている。10代の女性であっても、同意のない性関係を結ばされたときはもちろん、同意があっても100%の避妊というものはないので、中絶にどういう条件がついているかは他人事ではない。

母体保護法指定医の下で行われる中絶には、医療的理由がない限り保険が効かず、10万円以上かかる。

これも、とくに若い女性にとって、中絶へのアクセスを阻害している。ところが、経口中絶薬の原価は700～1000円だというのに、必要の無い入院を必須にするような形で承認して、10万円を維持して医師の利益を守ろうという動きがある。

このように日本では、性と生殖に関する自己決定の権利(リプロダクティブ・ライツ)は十全なものではなく、経口中絶薬がどのような形で承認されるかや、配偶者の同意を不要にできるのかどうか、今、ホットな争点になっている。

『中絶がわかる本』は、主として合衆国とカナダでの中絶の合法化をめぐる女性たちの闘いの歴史が、わかりやすく描かれている。またそれだけでなく、今でも非合法な国で最も弱い女性たちが窮地に置かれていることや、合衆国で共和党のトランプ大統領が選出されて以来中絶の機会が制限されてきたことや、アイルランド・韓国・アルゼンチンなどで近年中絶の合法化が勝ち取られてきたことが述べられている。NGO団体が、中絶が非合法な国のそばに船を出し、妊娠した女性を公海上に運んで中絶を行って違法性を逃れたり、インターネット上で安全な中絶が手に入らない国々の人々(日本も含まれる)からのリクエストを受けて、経口中絶薬を届けていることも紹介されている。

中絶の合法化のために闘った人々や、中絶に付きまとうスティグマ(非難の感情・社会的烙印)をなくそうと努めて来た人々が、カラフルな写真やイラストで紹介され、性と生殖の権利が自分たちのものであることが納得できる本である。日本でのリプロダクティブ・ライツの歴史については、T.ノーグレンの『中絶と避妊の政治学——戦後日本のリプロダクション政策』に詳しいが、原著は2001年刊であり、2008年刊の青木書店版は品切れである。しかし本年中に岩波書店から新版が出る予定である。2008年から最近までの動きは、記者によって補われるであろう。



ハックルベリー・フィンの冒けん

しばたもとゆき
マーク・トウェイン 著 柴田元幸 訳

*ほかにも多数の邦訳がある。

研究社 [定価:本体2,500円+税]

推薦 **加藤秀一** (かとう・しゅういち)

1963年東京生まれ。明治学院大学社会学部教授。専攻はジェンダーの社会学、生命倫理学。東京大学大学院時代に、河合塾小論文科で講師・フェロー・採点・模試出題を担当した。著書：『性現象論』（勁草書房）、『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』（ちくま新書）、『〈個〉からはじめる生命論』（NHK 出版）、『はじめてのジェンダー論』（有斐閣）ほか。

「明日に架ける橋」などの名曲で知られるサイモン & ガーファンクルに、「教会は燃えている」という一曲がある。1965年に作者ポール・サイモンがソロで発表した後、なぜか二人の公式アルバムには収録されなかったが、かれらの最高傑作の一つだと思う。そこで歌われるのは、白人至上主義者によって放火された黒人教会が闇夜に燃え上がる光景である。〈おまえが私の教会を燃やしても、私はいつか必ず自由になる〉と叫ぶように歌いあげるサイモンの声は、怒りと悲しみに震えるようだ。

それは現実への返答だった。この時期のアメリカ南部では、黒人教会への放火はありふれた犯罪だったのだ。それだけではない。1964年6月21日にそうした事件の一つを調査するためミシシッピ州に入った若き公民権活動家たち（黒人1人と白人2人）は、警察によって人種差別団体KKKの手に引き渡され、数日後に惨殺死体として発見された。その中の一人、20歳のアンドルー・グッドマンは、サイモンが通う大学のクラスメートだった。

剥き出しの暴力であり、不正だった。それでも加害者たちの一部が有罪になったことは、歴史的な前進ではあったといわねばならない。奴隷制時代には、黒人は白人と同等の人間ではなく、殺しても殺人ですらなかったのだから。『ハックルベリー・フィンの冒険』は、そんな19世紀前半のアメリカ合衆国南部を舞台に、暴力的な父親から逃げ出した少年ハックが黒人の逃亡奴隷ジムと繰り広げる長大な逃避行を描いた小説である。〈すべての偉大なアメリカ小説の源流〉とさえ言われる不朽の名作であり、あらすじ等は検索すればすぐわかるので省略するが、とにかく無類の面白さだけは保証する。波瀾万丈のストーリー、破天荒な口語文体（ろくに学校に通えなかったハックの英語は文法的に間違いだらけなのだ）、ミシシッピ川周辺の大自然の描写、善良な人々もクズな詐欺師どももそれぞれに味わいのある人物描写。だが物語の核をなすのは、〈奴隷所有は神の意志にかなう道徳的に正しい行いである〉と誰もが信じている社会に育ち、そうした観念を内面化しつつも、他方でジムへの深い友情をかくせない少年ハックの葛藤である。旅の途上、ジムを匿っていることから来る罪悪感に苦しむハックは、何度も密告しようと思わず。そしてついに元々

の奴隷主にジムの居場所を教える手紙を書いたとき、いちどは〈罪がぜんぶ洗い流されたような気分〉になる。けれどもそこで、ハックだけが〈ほんとうの、たったひとりの友だちだ〉と言ってくれたジムの言葉が胸によみがえる。ハックにとってのジムも同じだった。〈神さま〉と〈友だち〉のあいだで、ハックの心は引き裂かれそうになる。だが最終的にハックは決意するだろう。〈よしわかった、ならおれは地ごくへ行こう〉——そうして密告の手紙を引き裂くのだ、自分の心を引き裂く代わりに。

『ハック』が書かれたのは1863年の奴隷解放宣言から十数年後だった。その約一世紀後、なおも黒人とその〈友だち〉はリンチされ、教会は燃やされた。さらに半世紀を経た現在もなお、人種差別は終わっていない。2020年には、白人警察官が無抵抗の黒人男性を圧殺した事件を契機として、「ブラック・ライヴズ・マター＝黒人の命を踏みとじるな」と名乗る抗議活動が世界中に拡大した。黒人がただ街を歩いているだけで逮捕され、警官の気分次第で殺される——それがアメリカという国の21世紀の現実である。少なからぬ人々にとって、今もなお人種間の不平等は〈神さま〉が定めた〈正しい〉行いなのだ。

いや、それはアメリカだけの〈罪〉だろうか。理不尽な暴力／差別は、この日本と呼ばれるクニをも覆っている。外国人だ、被差別部落出身だ、女性だ、障害者だといった理由から、人間としての権利を踏みとじられる人々がいる。他方には、法律や伝統といった〈正しさ〉を掲げ、そうした現実を正当化しようとする人々もいる。両者は必ずしも別の人たちではない。私を含めて多くの日本人は、日本の文化の豊かさや社会の治安の良さを尊重したいと思っているだろう。だが、もしも私の大切な〈友だち〉が、たとえば同性愛者に死刑を課す異国から逃げてきた不法滞在者であるとしたら、私は日本国の法律に従う善良な国民として友だちを密告すべきだろうか？ それとも、〈友だち〉の傍らに立ち、一緒に〈地ごくへ行く〉ことを決意することができるだろうか？

そう言えば、QUEENのフレディ・マーキュリーは、あるインタビューで〈天国に行きたいですか〉と問われて、こう答えていた。〈いや。地獄の方がずっといいよ。面白い連中はみんな地獄へ行くんだ。君だってそうさ〉。



あいだ

きむら びん
木村 敏 著

ちくま学芸文庫 [定価: 本体950円+税]

推薦 谷 徹 (たに・とおる)

立命館大学名誉教授・特別任用教授。現象学・現代哲学。

著書：『意識の自然』（勁草書房）、『これが現象学だ』（講談社）など。

訳書：E・フッサール『ブリタニカ草稿』、『内的時間意識の現象学』（ともに筑摩書房）など。

哲学の用語はたいてい古代ギリシャ語をはじめとする西洋語である。とはいえ日本語もある。そのひとつが木村敏の「あいだ」（間）である。木村は精神医学者であるが哲学者でもあり、両方の側面で重要な用語をいくつか産み出したが、とりわけ哲学の側面ではその創造性において「あいだ」が重要である。この創造性とは、それなしでは見えにくい事象がそれによって見えるようになり、その探究可能性が開かれるということである。

この「あいだ」について木村がかなり自由に説明したのが、本書『あいだ』である。本書は、個々の生物に対して「われわれが「生きている」ことの根拠」あるいは「生命一般の根拠」があるという仮説を立てて、それを論証するという形で進む。「あいだ」として示されるのは、生命の根拠とわれわれ（や個々の生物すべて）との関係である。

こう書いても、「あいだ」はなにやら抽象的な概念だと思われるかもしれない。しかし、それは直観的にも捉えられる。おそらく木村もそうした直観的な経験からこの概念を得た。それは音楽、とりわけ合奏の経験である——実際、本書でもそれについて語られる。合奏の場合、何人かのバラバラな個人（個体）がただ集まってそれぞれ個別のパート譜にしたがって演奏するのではない。むしろ個人を超えた音楽の流れのようなものに調和する形で個人（個人）が演奏するときこそ、合奏が可能になる。これは、言ってみれば、音楽が（おのずから）自己実現する運動であり、そのなかで個人は有機的な身体に統合されるというような事態であり、こういう場合にこそ真に音楽的な音楽が可能になる。こうした個人を超えた音楽のようなものが生命一般の根拠に当たり、これと個人は「あいだ」で結ばれている。

これが精神医学的そして哲学的にどういう意味をもつのだろうか。たとえば統合失調症は、患者の脳の器質的な異常であれば、患者個人だけの問題だろう。現在の医学ではこの方向での研究が進んでいる。しかし、別の見方も可能である。それは患者とその根拠との「あいだ」に起因する問題だという見方である。

この発見はいわゆる精神病の病因だけでなく、健康者の（たいてい見落とされている）「自明な」前提をも示すことになる。ここで「あいだ」の創造性が大きく広がる。すべての個体は生命一般の根拠に根づきつつ、そこから立ち上がる。木村が「あいだ」によって——具体的な諸事例をとおして——この運動を見えるようにした著作が、『あいだ』である。このことを念頭に置いていただければ、本書が（そもそも読みやすい本だが）よりいっそう理解しやすくなるだろう。

しかも、「あいだ」は日常的な日本語であり——ハイデガーなどにも似たドイツ語があるとはいえ——、日本語話者にとってその創造力を発揮させやすいだろう。いや、現在の日本語話者が使っている日本語は、大和言葉だけでなく中国語や英語の混じった間文化的な言語である。この「間文化的」という語自体も「あいだ」とつながっている。「あいだ」の創造力の大きさが、よりいっそう明らかになる。さらに、思うに、「あいだ」をその語源である「あう」から捉え直すこともできるし、それはおそらくその創造力をますます大きくする。

こうした「あいだ」という語の「リレー」によって、「私」に閉じ籠もらず「あいだ」に開くことができる人は、「生きる」と「あう」とが共鳴する場に立ち戻り、その運動をみずから実演して新たな探究に向かうことにもなるはずである。